

大地

第 38 号
2011. 9. 30. 発行
浄 國 寺
上越市町3丁目14-10
☎025-523-5724

自由なこころ

熊谷守一美術館を観て

山崎隆昌

熊谷守一美術館は、守一が亡くなるまでの四十五年間住んだ宅地に建てられた小さな美術館だ。繁る木立のなかあるコンクリート造り箱型の建物である。守一のぬくもりが直につたわるような素敵な美術館。玄関横の外壁を見上げると熊谷の「蟻」が描かれており、思わず「守一だ！」と嬉しくなる。

一階の展示室には油絵の作品が、二階には墨絵や書等がそれぞれ三十点ほど展示されているが、ゆっくりと時間をかけて観ることが出来る。三階はギャラリー（貸しギャラリー）である。僕が熊谷守一の名を知ったのは三十七年前に、老人ホームの仕事で銀行へ出かけたときのことでも覚えていて。呼び出しを待つ時間長椅子に腰を下ろし、脇にある書架から手にした一冊の本『アサヒグラフ別冊美術特集熊谷守一』を見たことによる。

グラフには、明治十三年生まれの守一が、二十歳で東京美術学校（現：東京芸大）に入り、黒田清輝や藤島武二に学び、その後、明治、大正、昭和を経て、昭和五十二年九十七歳で死去するまでの作品と画歴が紹介されていた。

作品群なかでもその多くを占める、太い線で区切りをつけ、単色で塗り込められた、蟻、蝶、猫、鳥、等々の絵が印象的で、見ていると、不思議に描かれた蟻や鳥が動きだし、話しかけてくるように思えて、自分の中では何故かP・クレイの絵と同じものを感じた。

グラフには作品に併せ、守一の数々の写真と、守一に関係する人たちの文章が載せられていた。とりわけ晩年の、あまりに浮世離れた悠々自適の暮らしぶり、それにふさわしい仙人のような風貌写真には驚かされた。

守一は「絵かきくさいのは、やりきれない」と言う。また「私は虫が好きです。蠅とか蚊とかが世の中になくなってたら、世の中はすい分つまらなくなってしまう。蠅なんか面白い。とにかく夏になったら蠅がブンと飛んで来たり、病気なんかかしている時に良いです。自分の食う物のところに来てとまったり。昨日もフレームの中に蛇が出て来たが賑かて良い。蜂が冬になると来るのです。そうするとお砂糖を持って行ってやるのです」と言うのだ。

白州正子は、訪れ見た鬱蒼とした熊谷の庭

を「お庭が三千世界みたいに見えます」と表現し、それは「強烈にして不可思議な感動である」と述べている。

守一が日本画、書を始めたのは六十歳近くになってからと言う。書はやわらかく伸びやかで、観ている者は温かく包み込まれるようだ。書題も「独楽」「つる千年かめ万年」「蒼蠅」そして「ほとけさま」「なむあみだぶつ」など、心の思うがまま、純な子供のような。「光陰矢の如し」の書について、守一は「この言葉は好きな言葉ではありません。もし光陰矢の如くだったら、私はとっくの昔に死んでいます」と言っているのは、いかにも熊谷らしいと僕は一人で愉快になった。

自由な人といえ、全国を乞食し、放浪した俳人種田山頭火に《山行水行》の詩がある。

山あれば山を観る

雨の日は雨を聴く

春夏秋冬

あしたもよろし

ゆうべもよろし

熊谷守一は住処という空間の中で、種田山頭火は旅の地にその身をおきながら、思うがままに時を刻み続けられたようだ。「自由人」とはこのような人と言うのかと思う。

光よ、光

山崎 慎子

フィンランドから帰ったばかりの人に、「光の教会」のことを聞いたのは、お盆を控えた八月十日頃の事である。

それはヘルシンキの隣町であるヴァンターという所にあるミュールマキ教会のことで、設計者により日光の射し込み方が入念に計算され、日中は自然光にあふれ、夜は数多くのペンダントの光が、角度によってさまざまに光景を繰り広げるのだという。神の存在を感じさせる演出ということだろうか。

一度、ヨーロッパを観てみたい願望はありながら、未だに踏ん切りをつけられずにいる私だが、こんな話を聞けば、あゝ飛んで行って、その教会を目のあたりにしてみたいと心が動く。

光といえば、数年前の秋の日のことである。私は夫と母の三人で旅をし海辺に宿をとった。道路を隔てて砂浜から海に続く宿の部屋は大きな窓が切っており、ちょうど晴天に恵まれたその日の夕景は、いつまで見ても飽くことのない入り日の光景を見せてくれた。といつても海に沈み始めた太陽は、よそ見をしている暇もない程の早足で姿を消してしまう。

その余韻に浸りながら夕食を頂き、広い温泉を楽しんで床に就いたのは、何時頃のこと

だったろう。炊事・洗濯をせずに済む旅先のことゝて、のんびりと朝寝坊を決めこんでいたはずだったのに、何とはなしに目が覚めてしまった。まだ五時前である。少々損をした気分になり再び横になってみるのだが、何だか落ち着かない。

その時、カーテンの隙間から何やら光が射し込んできていることに気付いた。導かれるように窓辺に行き、そーッと外を覗いて一瞬の後に息を呑んだ。すぐには諒解できない光景が立ち現れていたのである。

昨夕、お陽さまが沈んで行ったその海に、今はまたお月さまが光を放ちながら沈んで行くこうとしているのである。静かにゆっくりと水面を揺らし光らせながら。

夫と母を起こして三人で見入る。誰も言葉が発することができない。目の前に繰り展げられている様は、真に厳かで静謐そのものであった。その後も時折思い出し、その都度温かい、それでいて厳肅な思いに満たされるのである。

やはらかに光たゆたふ有明の

月は静かに海に入りぬる

滅多に作ることもない（作ることでできない）短歌にその思いを込めたい一心で詠んだ一首である。

さて、「光の教会」のことを教えて頂いてから間もないこのお盆の十二日の夕刻、思いがけない光の来訪を受けたのである

明日の晴天を約束する夕焼けが続いた今年の夏は、また明日も雨は降らぬかと、夕焼け空が少々恨めしく思われる程だった。お盆の夕刻のことなので時々お詣りの人々もあり、西の窓は開いたままであった。西の空にあってお陽さまがどの位の位置であったのか、空は濃いあかね色に染まり、そのあかね色の光が隣の建物や樹木の間から本堂に射し込んできている。長押に下げた小さな提灯は、あたかも明りを灯したかのようにポツと光り、参詣の間に並べられた椅子をも照らし影を写し光の教会ならぬ「光の本堂」を造り出したのである。すごい、素敵、不思議、と乏しい形容詞をつぶやいてウロウロしている間、ほんの数分で光の本堂は消えてしまった。

その日の気象条件、居合わせた場所と時刻偶然にもそういった諸々の条件が揃わなければ、光の御堂を拝むことも、夕方入日を見た海に、明け方には月の入りを眺めるなどということも、そうそうあることではないだろう。光に導かれて、束の間ではあるが、それぞれの光りに出遇い、そして包まれたのである。光を見る

光に包まれる

そして光を感じる

今度はいつ、どんなふうに光に遇うことができるのだろうか。

祈りの風景

日本画家 柴田長俊

いろんな土地を歩いた。東北地方の祭り、おしら様、神の宿る木、そして二十歳の時、山形県境の温海で両墓制に出会った。私はその頃、柳田國男の民族学が好きで本を読んでいた。村の境界斜面に丸い川原の石が沢山並んで置いてある。その斜面を上がって行くと背中が寒くなった。その村には寺が在り、立派な墓石が並んでいる。「捨て墓」「ウメ墓」と呼ばれる墓と、「拝み墓」「参り墓」は別の場所にあった。不浄・穢れた肉体は土に埋めることにより浄化し、魂だけを別の墓で捧いだのではないかという柳田説にかぶれ、ご住職に「肉体は不浄で、魂だけ寺でお守りするの」とイヤな質問をした。何十年振りに同じ場所に行く機会があった。もっと怖かった。

インドに火葬を見に行った。一日中ガンジス河の河原で見ていた。河には生焼けの遺体が流され、沐浴する人々であふれている。そこから天なる国に行き、また生まれ変わるとは、とても思えなかった。その犬だけ痩せていなかった。ネパールでは鳥葬を見た。鳥が食べやすいように切断した遺体は、鳥と共に空に昇るのだ。

アフリカ、マリ共和国の中央部モプティの

東にあるドゴンの村では、どうしてあんな高い所に登れるか不思議に思える高い断崖に穴を掘り石で囲み、死者が眠る。ドゴンは、全知全能の神「アンマ」が泥を投げて太陽・月・星を作り、次に粘土を投げて頭を北に向けて横たわる人間の形をした大地を作ったという創世神話と伝説が今なお残る村である。

恐山は、江戸時代には「宇曾莉山」と書かれていた。下北半島の北岸は火山のカルデラで、噴気現象や温泉の湧出し、見ただけで荒涼とした地獄風景を展開している。ここに死者の魂が集まると伝えられ、夏には大祭が開かれる。亡くなった人をイタコに呼んでもらい会話ができる。同じリズムで同じ方言のきつい言葉で死者を呼ぶ。死んだ人が感謝の思いを伝え、生きてる人が「あの時こうしてあげたかった」と叫び悔やんで泣く。死んだ人の代わりにイタコも泣く。一年一回の死者との会話。祭りの場であり、皆一緒の宿坊に泊まる。供養を済ました人達の解放感はずざましく、エネルギーの発散の場となる。

博多近郊の篠栗四国八十八箇所霊場巡りは二泊三日で四国八十八箇所の時空を巡拝出来るとするが、この時空の旅を私も歩いた。寺から寺への道中が何かを考えさせるのだ。やはり精進上げの解放のエネルギーは同じだった。

アフガニスタンの砂漠ではバスが止まり、乗客が皆降りて祈りが始まる。

原始的な宗教から、チベット密教、イランの拝火教、ミナト神、シシリー島の八千体の木乃伊。それぞれの風土に合った葬儀は土着の宗教も加味し、風習が生まれる。こういう取材は十数年で、手術を経験した後少なくなった。

私は歳を重ね、より感じやすくなり困っている。私自身は宗教を持たずロマネスクの教会の壁画を模写し、祈りの教会を描く。平家納経を金銀箔のバイブルとし、寺をめぐり、神社に行ってお参りをする。

やはり興味があり、関連の本を探し、読んで面白そうだと思うと出かける。取材の途中で登った佐渡の宇賀神社は、形からしてご利益がありそうな形の山だが、入り口には墓があり、長い石段を登るとやはり怪しい空気がある。お参りもそこそこに戻るのである。何故こんなに怖がりになったのか。

それぞれの土地で、それぞれの神に人は祈る。人々の祈る姿に魅かれ、その先にあるものを求めている。たくさん土地を歩く、美しい清らかな空気のとこると、足早で歩き、振り返る事をしたくない場所がある。前者は非常に少ない。

畏敬の気持ちで自然と頭をたれる場所がある。田んぼの中に小高い丘があり、祠がある。土地の人は通り過ぎる時に、頭をたれ、祈る。心のあり方の一つかもしれない。

ワン公部屋始末記

山崎 慎子

大きな声では言えないが、ウチのワン公二匹はこの夏まで、十畳一部屋をその棲み家としていた。以前外国人に、日本人の家は兎小屋とまで言われたこの国で、たかがワン公ごときである。

しかもパグのくせに！筋肉質で力持ちの四才の華は、戸という戸をいとも簡単に開けて脱走する悪い奴で、そのついでにヒトの食べ物を見失したり、ある時は縁の下にもぐりこんでネズミ捕りのベタバタの粘着剤を体にくっつけて来たり、悪さの限りを尽くすという有様だった。サッシの戸も、相当重い襖も独特の感と技術と根気で、いとも簡単に開け脱出する。華が出て暫くして「あー、そうか」とばかりに、気付いた年上の蓮がノソノソとその後が続くこともあった。

困った私達は恥ずかしながら大工さんをお願いをした。「この部屋の戸という戸に鍵を付けて下さい」犬バカと笑われ、お犬サマだねと笑われながら、押入を含め五ヶの鍵が付けられた。しかし急いでいる時など、つい施錠を忘れてしまうのである。あるいはモタモタしているうちに、足下からするりと脱出すること数えきれぬ程。

二時間程の外出から帰り、オヤツと思う。

ガラス戸の向こうに在るはずのないワン公の影が動いている。鍵を忘れた所から脱走して家中をかけずり廻り楽しんだらしい。今度は建具屋さんがあれこれ考えて、ワン公が飛び越えられない高さの板を落とす仕掛けを考えしてくれた。しかし、すばしっこい華を横において、九〇センチの板を五ミリ程の溝に落とすのは思った以上に難しい。結局は私達が短い足でヨイショとその板を跨ぐことになってしまった。休暇に帰省した娘たちが呆れている。「そのうち足もあがらなくなるし、転びでもしたらどうするの」と釘をさされる。

正直言えば、不便には不便だったのである。ワン公部屋の奥には二つの部屋があり、私達は殆どの場合、遠廻りに廊下を廻ってその部屋に行っていたのだから。

その不便と、この夏ようやく決別することができた。きっかけは長男のひと言だった。この夏の初めに、二十年振りに帰って来ることになった長男がある提案をした。「犬を繋ぐか、部屋を仕切って犬の場所を狭くして、ヒトが余計な気を遣わずに往来できるようにしませんか」。夫は初め、両方とも却下！と強硬姿勢。犬を飼いはじめた時から首輪も鎖も拒否してきたのは彼である。長男との駆け引きが続く。

ある日、とうとう夫が折れて、又大工さん

にお願いをする。「全てお任せしますから、窓側にワン公の空間を仕切って下さい。但し必要な時には簡単に取り払いができて、ひと部屋にして使えるようにお願いします」

かくて七月も終ろうとしていたある昼下がりに、杉と桧で造られた三分割の仕切りが運びこまれた。力持ちの華が体当たりしても動かないようにするには杉材だけでは軽すぎたという。白内障で少し目も見えなくなっている蓮は、大工さん達の作業にただウロウロしている。一体、何が始まったのだ？という態である。肝っ玉の据わっているような華は、実はかなり用心深いところもあり、ナンダ！ナンダ！とばかりに興奮して吠え廻っている。ほぼ三分の一以下と狭くなった空間に、納得いかぬ様子で、柵の向こうからうらめし気にこちらを見ていたが、私達にとっては結果オーライである。

しばらくは仕切り板を跨ぐ習慣が抜けず、遠廻りして奥の部屋に行ったり、気持ちの方が、跨ぐ準備をしていたり、というふうだったのだ。そういった煩わしさから解放され、ワン公とヒトが共存する空間を取り戻して、私達は何度となく大工さんに感謝し、ついでに長男にも密かに感謝した。

「大体このウチは犬に甘すぎるんだって」彼のちょっと得意そうな顔が少々やしい。